

「今を生きる」の意味

宮野公樹

(京都大学学際融合教育研究推進センター准教授)

「未来」について語るのは考える以上に辛い作業です。まず反射的に「誰の？」と考えてしまいます。自分のか、それ以外のか。そもそも自分の見方以外の方法でこの世を見ることはできないため、日本あるいは世界の未来という体で、「自分」の未来を語ることになる……学者として考えを文章に残すということは己の志を公にすることであるそのことに自覚的なら、未来を語るとはきつとそういう覚悟を伴うことになるのだと思います。そうすれば自ずと謙虚になる。ならざるを得ない。不条理で混沌としたこの世、そもそも確固たる答えや真理などなきこの世について断定的に話さざるを得ない状況はやはりどこか苦しいものであり、そういう葛藤から生じた言葉こそが多くの人に響くでしょう、結果的に。

そう、未来は結果。どうしてもそうなるのです。存在そのものに価値はなく、それでも存在するからには少しはマシに生きたい。この存在に正しく生きたい。そうポジティ

うな虚無からこそ生まれる絶対的価値を生き様とする瞬間瞬間が人生Ⅱこの世なのでしょう。ゴゴゴゴと音を立てて流れているような時間の捉え方で、ましてその流れを予測しようとするのは未来と自分を分けて考えているからでしょう。

もちろんフィクションと割り切って未来を語る選択肢もあります。思い切って未来を語れと銘打つ本特集はきつとそうなのですよ。それに従い、私の関心事である「大学」は一〇〇年後どうなっているかと妄想するに、情けないことですが、何か破壊的で致命的な事態でも生じていない限り、大学に適用される経済的合理性をいわゆる人文知で押し戻していることはないと思います。大学の悪しき状況はよく文科省や財務省等の霞ヶ関による制度や政策の問題とされますが、どう考えてもそれは大学で働く個々人のせいでしょう。令和元年の今、大学の現状を良しとする人はほぼいないという意見をよく見受けますが、それは自分個人が不満なだけであり、現状においても正しく生きようとする人間は愚痴など言わず、他人のせいなどにせず、自身の人生を引き受けてまっとうに考え学び問うて暮らしている……このように根本のところは大学人一人一人の態度、精神の問題なので、つまるところ話はごく簡単に、破壊的で

致命的な何かを待つことなく、少々の勇氣を持つてこの瞬間から自分の魂に対して誠実に生きればいいだけです。不安だ不満だといって甘えて安心しているその自分の姿こそ見よ、学者なら。

未来とは創るものだと言ったのはドラッカーでしたか。しかし、天災により一日でも通電停止になればパニックになる暮らしを誰が望んで創ったんでしょうね。むろん自分（たち）ですがね。テクノロジーは我々を幸せにも不幸にもしました。そのテクノロジーがおわします席にアートや宗教が座つたとしても、我々のこの幸・不幸の形式は絶対に変わりはありません。当たり前のこと、ほんとうのことを不明瞭に曇らせるのは、幸・不幸の内容のほうにしか注意を払わないという幼稚な思考がなす業だからです。であれば、我々はその絶対形式にこそ視点を移し、今我々は何をやっているのか、そしてそれは何をやっていることになっているのか、という仕方です。これこそが古来から続く学問の構えであり、一〇〇年後にも人間がいる限り決して変わっていないと確信されるものです。

他方、我々は未来に縛られているといったのはニーチェでしたか。そもそも今しかないのに未来があると信じるこ

とから不幸がうまれるんですね。松村圭一郎ほか『文化人類学の思考法』（世界思想社）のあのくだり。「小学校に入れば中学校のため。中学校に入れば高校のため。高校に入れば大学のため。大学に入れば社会で働くため。社会で働けば老後のため……いったい我々はいつ「今」のために生きるのでしょうか」を最後に引いて、雑文の筆を置きます。

.....○